

月刊

いじろのとも

第十三卷

一月号

斬り捨て御免

リストラを

大手を振って

できる世の

冷たきことよ

動物のごと

生きる哲学を問う

短歌の傾向が

世紀末の

修辞に重きを

置いた歌から

作歌主体の

生きる哲理や哲学を

問う概念歌に

変わるうとしている

という

いま

地球規模で

生きる哲学が

求められているのだ

人生を考え直して

みたい人は（九六）

『正法眼蔵』解説（四〇）

仏性の巻を続けます。

五祖大満禪師は、州黄梅（きんしゅうおうばい）の人なり。父無くして生まれ、童児にして道を得たり。乃（すなわ）ち、松を栽（う）うる道者なり。初め 州の西山に在りて松を栽えしに、四祖の出遊に遇う。道者に告ぐ。「吾れ汝に伝法せんと欲するに、汝已（すで）に年遇（すぎ）たり。若し汝再来せば、吾れ尚お汝遅（ま）たん」。

師諾す。遂に周氏家の女（むすめ）に往きて托生（たくしょう）す。因みに濁港（じょくこう）の中に抛（す）つ。神物（じんもつ）護持して七日損せず、因みに取りて養う。七歳に至りて童子と為り、黄梅の路上に於いて四祖大医禪師に逢う。祖、師を見るに、是れ小児なりと雖（いえど）も、骨相奇秀にして常の童に異れり。

祖見て問うて曰く、「汝は何の姓ぞ」。師答えて

曰く、「姓は即ち有、是れ常の姓にあらず」。祖曰く、「是れ何の姓ぞ」。師答えて曰く、「是れ仏性」。祖曰く、「汝に仏性無し」。師答えて曰く、「仏性空なるが故に、所以（ゆえ）に無という」。祖、其の法器たるを識り、侍者為（な）らしめ、後に正法眼蔵を付す。黄梅東山に居して、大いに玄風を振う。

例によつて、現代語訳として増谷文雄著『現代語訳正法眼蔵第二巻』（角川書店刊）から引用させて頂きます。

五祖の大満禪師は 州黄梅の人である。父なくして生まれ、童児にして一つの技術を得た。すなわち松を栽（う）うる技術者であった。はじめ 州の西山にあつて松を栽えていたが、たまたま四祖の出遊するに遇つた。四祖は彼につけていった。

「わたしは汝に法を伝えたいと思う。だが、汝はすでに年をとり過ぎてゐる。もし汝が再び生まれかわってくるならば、わたしはなお汝を待とう」。

彼はそれを諾（うべな）い、ついに周氏の家の女（むすめ）によつて生まれかわつた。すると、港の濁水のなかに棄てられたが、不思議な力が護つてくれて、七日のあいだ生きていた。そこでもう一度連

れもどされ養われた。七歳の童子となったころ、黄梅山にいたる路において、四祖大医禅師に逢った。四祖が彼を見ると、小児であるけれども、骨相ひいでて、つねの童児と異なっていた。そこで問うていった。

「汝はなんとという姓か」

彼は答えていった。

「姓は有であります。これはつねの姓ではありません。」

四祖がいった。

「これはいつたい、なんの姓か」

彼はいった。

「これは仏性であります。」

四祖がいった。

「汝に仏性はない。」

彼は答えていった。

「仏性は空でありますから、また無といえます。」

四祖はその仏法の器たるを知って、彼を侍者となし、やがて正法の眼目を伝えた。彼は黄梅の東山に居して、大いに禅風をひろめた。

今回の部分は、漢文で書かれています。ここでは、読み下し文だけを載せました。その漢文は、主に、『景

徳伝燈録』という禅者の問答を集大成した三〇巻からなる本から、引用されています。この本は、一〇〇四年に成立しましたが、後の禅宗の発展に大きな影響を及ぼした本です。

お読み頂いてお分かりだと思いますが、この部分は、四祖道信（後の諡（おくりな）を大医禅師という）と五祖弘忍（諡は大満禅師）との出会いの消息を語った部分です。

文意は、現代語訳で大体お分かりと思います。少しだけ、重要と思えるところを解説しておきます。

それは、四祖と五祖の問答の部分です。その一つ目は、四祖から、姓は何かと聞かれて五祖が「姓は有（う）です」と答え、四祖が、それは何かと聞くと「それは仏性です」と答えた部分です。

五祖は、姓は性、つまりお前の本性は何かと問われたと解釈して、自分の本性は「有」であり、「仏性」である、と答えたというわけです。

しかし、四祖から「汝に仏性はない」と言われて、五祖は、とつさに「仏性は空でありますから、また無といえます」と答えたところは、子どもながら、見るべきところがあると、考えて侍者としたというわけです。

でも、なぜ、四祖が「汝に仏性はない」と言ったのか、

子どもだった五祖の答えを正解として引き出す為だったのか、それは、私は、大いに疑問だと思います。

私は、五祖は子どもながら、既に、仏教を勉強していて、人間の本性は「有」であり、「仏性」であることを知っていたのだと思うのです。

しかし、ここが大切なのですが、知っていても、それでその人に仏性があるとは、言えないのです。人間以外ですと、あるがまま、そのままで仏性なのですが、人間は、残念ながら、いや有り難いことに、仏を信じ、自らを磨かない限り仏性とは言えないのです。つまり、人間では、磨かなければ、残念ながら、仏性は、煩惱によって覆い隠されてしまっているのです。しかし、有り難いことに、磨きますと、仏性が輝き出て、無上の大楽（生かされて生きる喜び）が湧きだして来るのです。

そのことを四祖は「汝に仏性はない」言ったのですが、子どもですから、それは、分かりません。でも、とつさに理屈をつけて「仏性は空でありますから、また無といえます」といったことで、四祖はこの子が「仏法の器」であることを感じ取って、身近におく弟子（侍者）にしたのだと思うのです。

そうすることでのみ、真に仏法を伝えることができるからです。

自作詩短歌等選

池田小殺傷事件の意味

大阪教育大学付属
池田小学校事件の
初公判が開かれた

それを機に

新聞に載った
命を失った8人の
子どもたちの親が
寄せた手記を読むと
涙が出てくる

何の罪もない
死の意味すら
わからない
7〜8歳の子どもたち

親にとって
かけがえのない
一生懸命生きてきた
よい子たち

かつて犯罪史上
例を見ない
残忍な犯罪が
なぜ生じたのか
日本人は
子どもたちの
命と引換えに
このことをよく考えて
みなくてはならない

未婚率の上昇

未婚率

高まるばかりで

日本の

活力弱まり

衰退必定

日本人

あらゆる人が

血相を

変えておのれの

エゴを追求

差別との闘い

ハンセン病訴訟が

全面解決したという

差別との長い闘いに

ここから

敬意を表したい

犯罪加害者の居直り

犯罪加害者も

被害弁償では

被害者と

平等・対等な立場で

居直った交渉ができる

これも

民主主義のお陰なの

現行裁判制度のお陰なの

罪の懺悔はどこへ

反省はどこへ

吹っ飛んだのやら

教師不信

いじめで自殺した

中学3年生の親に

町と県は

壹千万円を支払えとの

判決が下った

学校で起こっていて

親の知らないことを

先生も

知らなかったでは

すまされない

ということ

学校で問題を起こした

生徒の家を

家庭訪問すると

親は

家ではいい子です

学校で問題を

起こすのは

学校が悪いから

ではないですか

という親もいる

不信の社会・学校

親は教師を信頼しない

教師も親を信頼しない

教師同士も

互いに信頼しない

サル生態学に接して

サルの研究をして
人間を知りたいという
それは
間違いだ

人間が

サルと共通の祖先から
進化してきたことは
疑えない
科学的事実である

しかし
進化したとき
人間はサルにはない
人間固有の特性を
獲得した
それは
精神という
自己からの他己の分化だ

しかし今

民主主義のお陰で
皆が自己を肥大させ
それを
忘れている

農業を産業化する！？

農業を
産業化して
競争に
たえる力を
付けという
そんなことでは
解決を
図れるほどに
農業は
単純ではないと
知るべきなのに

自作随筆選

大衆が政治を動かす！？

暮れの十二月二十九日付けの読売新聞文化欄に、ノンフィクション作家の吉岡忍という方が、「今年を振り返る 大衆こそが時代を動かす 森、小泉両政権も米大統領も踊る人形」と一見ショッキングな題をつけて、記事を寄せていました。

読んでみて、民主主義の本質が、全く、お分かりでないようで、驚きました。そして、ぜひ一言申したい気持ちになりました。

この方は民主主義について次のように書かれています。

大衆という言葉は、元来、「無名の、一人ひとりの人間たちこそ社会の主体なのだ」という民主主義の原則に寄り添う言葉だった」と。

またその後で、次のよう述べています。「ところがその九〇年代から、私たち一人ひとりが再び、しかし、まったくちがう仕方で大衆という存在を意識しはじめたのではないだろうか。今度は自分以外のその他大勢、何を考えているのかわからない不気味な烏合(うごう)の衆、

全く忘れられ、無視されています。

そうなりますと、この方が言われますように、他者は、「自分以外のその他大勢、何を考えているのかわからない不気味な烏合（うごう）の衆、量としての人間の群れ」となってしまうのです。

人間は、元来、他者との関係の中に存在しています。その「他者との関係」とは、自分のことを思うと同じように、他者のことを思いやることを意味するのです。それが、人間が人間である所以（ゆえん）なのです。

なのに、いま、多くの人、特に日本人が、こうした人間関係を喪失して、他者を「不気味な烏合の衆」として認識しはじめているのです。

そして、この方が最後に述べていますように、「私」とは何であり、無数の『私』が集積した大衆とは何者なのか。そして、わかりやすくシンボル化した権力と大衆と私との関係はどうなっているのか。私たちは手強い間いと向かい合っている」と認識せざるを得ないところに追い込まれているのです。

人間は、信仰を失うとき、自己の存在の意味を見いだすことができなくなります。他者は不気味な存在として迫ってくるのです。それは、まさに精神病理で言いますと「精神分裂病」の世界なのです。

交遊の相手

一月十二日付けの日本経済新聞の「交遊抄」という欄に、有名な松本幸四郎という歌舞伎俳優の方が、「感動の出会い」と題して、ご自分の交遊について書いておられました。

その中に少し気になる部分がありました。それは、次の文章です。

「僕の交遊録には、ごく普通の、身近にいて、僕をとっても大切に思ってくれている人の名前しか書かれていない」。

お断りしておきますが、私は、この方のファンでもなければ、この方を嫌いなわけでもありません。実は、私は現在は、殆ど、歌舞伎や映画やお芝居などに関心がありません。ですから、この方に特別な思いがあつて取り上げるわけではないのです。

多分、多くの方にとって、自分が交遊している人のことをよく考えてみれば、交遊している人は、自分に何かよいことをもたらしてくれる人なのではないかと思うのです。この方が、そのことを素直に表現されていましたので、ここに取り上げさせて頂いたわけです。

実は、人間にとって最も大切な交遊の相手とは、自分が何歳になっても達しえない、人間としての崇高な境地に達している人、あるいは達しようとして修行に励んでいる人たちなのです。

そういう人は、キリスト教では牧師さんですし、仏教でいえば、お寺で修行するお坊さんということになります。

でも、こうした人との交遊には、信仰を失ってしまっている大多数の日本人は、殆ど価値を置いていません。また、残念ながら、それに値する牧師やお坊さんも、とても少なくなっています。こうした現実を反映して、人々は、自分にとって利益があるか、あるいは自分が好きか、といった自己に閉じた基準によってのみ、交遊相手を選ぶことになっています。

そういう相手も、勿論、不必要というわけではありませんが、しかし、それだけでは、人間的な進歩がありません。もっといいますと、進歩がないばかりか、人間として墮落し、あるいは不安になって行きます。そして、それを解消するために、自分の情動、つまり性欲、食欲、優越欲などの欲望や、快苦喜怒哀楽などの情緒や、気分などに執着を強めるのです。そして、ますます自己に閉じていきます。日本人が、いまそうなっているのです。

釈尊のごとば（一〇七）

法句経解説

（三四七）愛欲にならずんでいる人々は、激流に押し流される、蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々はこれをも断ち切つて、顧みることなく、すべての苦悩をすて、歩んで行く。

愛欲につきましては、既に昨年七月号をはじめとして、十、十一月号と毎号のように出てきました。

もう一度読み直して頂ければ幸いです。特に、十月号で解説しました（三四〇）をご覧いただければ、仏教では、愛欲は、異性に対する性的な欲望だけではなく、煩悩までも含んでいることがお分かりになると思います。私のことばで言いますと、「情動」の満足、あるいは追求ということになります。

さて、ここで普段あまり使わないことばが出て来ました。それは、「愛欲にならずんでいる人々」という部分の「なすむ」ということばです。

広辞苑（岩波書店刊）を引いてみますと、次のような意味が出ています。

時間を超越しますと、いま生きている刹那、刹那が、永遠の今ということになるのです。実感として言いますと、もう何万年も生きて来た、あるいは釈尊と同じ時代からずっと生きている、という気がするのです。それでいて、死ぬことが気にならないのです。

先日、岩波新書で「大往生」という大ベストセラーを書かれた永六輔という方が、ラジオだったかテレビだったかで、人間は「幸せに死ぬこと」が大切だというような意味のことをおっしゃっていました。それが私にはとても、印象に残っているのですが、それは、どうも、永氏がお年をとられて来て、死が気になりだしたのだと、私には思えたからなのです。

人間で大切なのは、「幸せに死ぬ」といった抽象的なことではなく、老いても、あるいは病気になっても、死がまったく気にならなくなる、という極めて具体的なことなのです。でも、どうしても、幸せとか不幸せとかで言わなければならぬとしますと、生きていても幸せ、死んでも幸せ、ということなのです。

それが、ここで言っています、時間への執着を捨てるということなのです。

次に出てきます「生存の彼岸に達した人」とは、そうした境地に至った人のことなのです。そして、そういう

境地では、「あらゆることがらについて心が解脱している」といえるのです。

そうなりますと、「もはや生まれと老いを受けるところが無い」ということになります。

ここで老いということには、勿論、死のことが含まれていません。ですから、ここで言っていますのは、生死（しょうじ）を超越することです。

この法句経にも、平成六年の第五卷十一月号で解説しました（一一〇）から（一一五）に「くするよりは、一日生きるほうがすぐれている」というのがありますが、その中の（一一四）は、

不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きることのほうがすぐれている。

となっていました。

時間を超越するとは、まさにこの偈にあるような境地に至ることなのです。この「不死の境地を見て一日生きることのほうがすぐれている」とは、不死の境地にいたれば、一日生きたことが、百年生きたことよりも、もっと多く生きることにあたいするということなのです。それは、千年であり、万年であるわけです。

後記

一、新年明けましておめでとうございます。読者の方で早々に年賀状を頂きました方に、紙面を借りてお礼申し上げます。申し訳ないことですが、こちらからはどなた様にも、年賀状を差し上げることが控えております。どうぞ、お許し下さい。

二、振り返って見ますと、この『こころのとも』を出し始めて、もう十二年が過ぎました。また、同時に始めました一日に一つ以上の詩や短歌や随筆を書くという目標も、怠りなく達することができました。これは、一人でも多くの方に幸せになつて頂きたいという大願から、あるいは、障害を持った方々が、一人残らず幸せになる世界を実現したいという念願から、そして熱心に読んでくださる温かい読者の方の声援によって、ここまで続けて来られたのだと思います。あらためて感謝いたします。

三、先月号で研究室のホームページを作ったことをご紹介しましたが、早速アクセスして下さった方がありました。アクセス回数のカウンターが付いていますが、これまでの平均ですと、一日三〜四件ではないかと思えます。この『こころのとも』も載せていきますので、多くの方がアクセスして読んで下さればいいのにと念じています。

四、今月号には、随筆を二編載せました。新聞を読んで

いますと書きたくなるような記事がいっぱいあるのですが、抑えています。いつも書くことだと思うのですが、どんな問題についても、現実の事象（現象）をかかなりの確に把握している方もあるのですが、残念ながら、その本質が分かっている方に全く出会いません。真の原因が分かりませんので、対策も右往左往で、対症療法の域を出るものを見当たりません。新聞を読売から日経に変えましたので、経済の問題に関心が向くのですが、経済についても同様の感が否めないのです。正月早々、悲観的で申し訳ないのですが、世界は益々不安定要因を増して行くことになると思います。

月刊 こころのとも 第十三卷 一月号 (通巻 一四五号)	平成十四年一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 01610 8 38660	

